

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.201

November 2019

ヘンリー・デヴィッド・ソローの足跡を訪ねて

上野 継 義

山への憧れはいやまし、アメリカでも山靴を履いた。ニュー・イングランドでは、ヘンリー・デヴィッド・ソローの足跡を訪ねて、メインの森を目指した。ウォールデン湖畔を一周した後、アパラチア山岳クラブ（AMC）の編んだガイドブックを頼りに、モナドノック山、リンカン山、アダムズ山、マディソン山を踏破し、バクスター州立公園でキャンプして、メイン州の最高峰カタディンに登頂した。この山名は先住民の言葉で“greatest mountain”を意味している。ソローの登頂時と同様、深い霧に包まれていた。

山旅に多少の困難はつきものである。マディソンからの下り（Watson Path）、沢との出合で道を見失ったことがある。来た道をしばらく戻り、トレイルを丁寧に辿りなおしてみたが、同じところで踏み跡は消えている。冷水で口を漱ぎ、頭を冷やし、地形図を見直すと、この溪流が下流域でふたたび山道と交叉していることに気づき、意を決して沢を降ることにした。小さな滝を越えるときに足を取られて全身ずぶ濡れとなるが、日が暮れかかる頃、Bowman Base Camp Youth Hostelという名の山小屋に無事帰着した。今はなくなってしまったが、リスが自由に出入りする穴だらけの楽しい小屋であった。

グレーシャー国立公園では、ゴードン・エドワーズの『クライマーズ・ガイド』と合衆国地質調査所の地形図、方位磁石とナイフを入手し、アピストキ・ピークを目指した。巨大なカール（圏谷）の底に降り立ち、泉のみなもとを訪ねて最初のひとしづくを掬う。あの細流の清らかさ、神聖さと思うと、今も胸が締めつけられる。赤褐色の岩が層をなす頂から、Two Medicine Lakeの鏡面を足下に望み、荒々しく雄大な景観を独り占めした。帰路は、地盤のゆるい西側斜面を、湖に注ぐ沢筋に当たりをつけて駆け下りた。ところどころ山肌にしがみついている這松を頼りに、崩れ落ちる岩に乗って一緒に滑り降りるといった塩梅である。その翌日は、アピストキと対峙するヘンリー山に挑んだが、頂上直下の急峻な岩場を攀じ登ることができなかった。

なぜ山に登るのか。返答に窮する問いだが、アメリカでの山旅について言えば、ソローとの出会いが大きな誘

因となっている。

ソローは山登りやカヌーの操舵など大自然と交わる術に長けていた。この道の熟達者がするように、彼もナップサックの紐をとして、持ち物一式やバックギングの方法を公開し、同好の士の参考に供している。メリマック川の遡上ではバッファローの毛皮にくるまって寒さを凌いでいる。メインの森へは、木綿地のテントと大きめの毛布のほかに、植物図鑑や野鳥観察用の望遠鏡、ポケットサイズの顕微鏡、昆虫採取用の箱などを持参している。ソローの山登りは博物学的な関心の延長線上にあったのだろう。草花の名前満載のソローの文章を読むたびに、英国の文人ジョージ・ギッシングの言葉を思う。「散歩の途中出会うすべての花を一つ一つ名ざして呼べるようになりたい。」

大自然の声に耳をかたむける姿勢にも共感をおぼえる。ソローは先住民から多くを学んでいた。「インディアンが大自然と親しく交わる様は、あたかもお互いの独立自尊を認め合うかのようだ。」親しき仲にも礼儀あり、というわけである。そうであるからこそ、大自然は自らを語りだすという。ソローは、自己の身体感覚をウィリアム・エラリー・チャニングの詩に託し、最初の作品に引用している。川の流れるに内なる声あり。耳澄ます者にこころ開き、静寂の中で語りかけること、賢者のごとし。

ソローとの奇しき縁を感じた体験もある。モナドノックの山頂は視界を遮るものない一塊の岩稜である。メインの森からの帰途、寒風を切って再登頂をはたした。頂上近くの巨石の間から窺う、あの景観を目に焼き付けておきたかったからである。雲行きあやしく、下山の途中、降り出したが、おかげで岩の感触を確かめながらゆっくり歩くことができた。後年、プリンストン大学出版の『写真入り・コンコード川とメリマック川の一週間』を編み、同書に挟まれている Herbert W. Gleason の撮影した風景写真に思わず息を飲んだ。寒さに震えながら再び訪ねたあの場所は、今から161年前、ソローがテントを張り、夜を過ごしたところだった。大自然が語りかけてくることからは、時を超えた一貫性があるのかもしれない。

（京都産業大学）

アメリカ学会役員一覧（2018～2019年度）

会長

高橋裕子（津田塾大）

副会長

宇沢美子（慶応義塾大） 斎藤眞賞選考委員会委員長兼任
貴堂嘉之（一橋大） 清水博賞選考委員会委員長兼任

常務理事

岡山裕（慶応義塾大） 会務委員会会務担当
西山隆行（成蹊大） 会務委員会財務担当
佐久間みかよ（学習院女子大） 年次大会企画担当
中野勝郎（法政大） 年報編集委員会
杉山直子（日本女子大） 英文ジャーナル編集委員会
小野直子（富山大） 会務委員会会務担当
清水さゆり（ライス大） 年次大会企画担当
兼子歩（明治大） 年次大会企画担当
土屋由香（京都大） 国際委員会
前嶋和弘（上智大） 広報・電子化情報委員会

理事

井口治夫（関西学院大）
大森一輝（北海学園大）
小野直子（富山大）
川島浩平（早稲田大）
倉科一希（広島市立大）
佐々木卓也（立教大）
杉山直子（日本女子大）
土屋和代（東京大）
中野耕太郎（大阪大）
中山俊宏（慶応義塾大）
新田啓子（立教大）
平体由美（東洋英和女学院大）
待鳥聡史（京都大）
矢口祐人（東京大）
渡辺靖（慶応義塾大）
伊藤裕子（亜細亜大）
大類久恵（津田塾大）
小野沢透（京都大）
貴堂嘉之（一橋大）
小檜山ルイ（東京女子大）
佐藤千登勢（筑波大）
舌津智之（立教大）
土屋由香（京都大）
中野博文（北九州市立大）
西崎文子（東京大）
橋川健竜（東京大）
前嶋和弘（上智大）
松原宏之（立教大）
和田光弘（名古屋大）
宇沢美子（慶応義塾大）
岡山裕（慶応義塾大）
兼子歩（明治大）
喜納育江（琉球大）
佐久間みかよ（学習院女子大）
清水さゆり（ライス大）
竹沢泰子（京都大）
中野勝郎（法政大）
長畑明利（名古屋大）
西山隆行（成蹊大）
肥後本芳男（同志社大）
増井志津代（上智大）
村田晃嗣（同志社大）
渡辺将人（北海道大）

監事

遠藤泰生（東京大）
大津留（北川）智恵子（関西大）
森本あんり（国際基督教大）

評議員

会沢恒（北海道大）
阿部公彦（東京大）
飯田健（同志社大）
石山徳子（明治大）
奥田暁代（慶応義塾大）
落合明子（同志社大）
川村亜樹（愛知大）
小林剛（関西大）
佐藤真千子（静岡県立大）
菅原和行（福岡大）
辻祥子（松山大）
中嶋啓雄（大阪大）
松井孝太（杏林大）
南川文理（立命館大）
森丈夫（福岡大）
山口和彦（上智大）
若林麻希子（青山学院大）
青木深（東京女子大）
阿部容子（北九州市立大）
石川敬史（帝京大）
板津木綿子（東京大）
小田悠生（中央大）
小原豊志（東北大）
北美幸（北九州市立大）
斎木郁乃（東京学芸大）
下條恵子（九州大）
高光佳絵（千葉大）
寺田由美（北九州市立大）
波戸岡景太（明治大）
松永京子（神戸市外国語大）
宮田伊知郎（埼玉大）
安岡正晴（神戸大）
山本貴裕（広島経済大）
渡邊真理子（西九州大）
青野利彦（一橋大）
新井景子（武蔵大）
石原剛（東京大）
大串尚代（慶応義塾大）
越智博美（一橋大）
川口悠子（法政大）
小濱祥子（北海道大）
佐々木一恵（法政大）
菅美弥（東京学芸大）
塚田幸光（関西学院大）
中島釀（拓殖大）
古井義昭（立教大）
南修平（弘前大）
森聡（法政大）
山岸敬和（南山大）
余田真也（東洋大）

河崎信樹・吉田健三・田村太一・渋谷博史 著

『現代アメリカの経済社会

——理念とダイナミズム』

(東京大学出版会, 2018年, 3,080円)

本書はアメリカ経済を、20世紀末からの「グローバル化」という広がりのある視野の中で、「経済社会」という構造的な切り口で解明しようとしている。しかも副題にあるように、理念(アメリカ自由主義)とダイナミズム(柔軟な構造変化)を軸にして、分析することを目指しているようである。

経済学者であるが故に、アメリカ自由主義を政治思想や社会思想から把握するのではなく、「Job」を個人の自由や自立の基盤とする実際の自由主義と想定して(第1章)、グローバル化の下でアメリカ経済が柔軟に変化するプロセスを、その「Job」の編成が大きく変化するという視角から説明している(第2章)。さらに、そのアメリカ経済のダイナミックな構造変化と「グローバル化」の関係を分析するために、「外なるグローバル化」と「内なるグローバル化」という冒険的な枠組みを設定している。

例えば、20世紀のアメリカ経済の中心産業であった自動車産業でいえば、「外なるグローバル化」とはアメリカ企業(ピック・スリー等)の世界展開であり、逆に「内なるグローバル化」とは、日本やドイツや韓国の企業のアメリカ国内での生産工場の進出である(第5章)。また、貿易や国際金融の構造変化やアメリカの国際経済政策におけるグローバル化への対応(第3章,第4章)と、国内の「産業の空洞化」(製造業からサービス業への転換)を整合的に結びつける説明は説得的である。

農業・食料産業(第6章)とICT産業(第7章)は、21世紀のグローバル経済においてアメリカが最も国際競争力を有する部門である。これらには上述の「理念とダイナミズム」が鮮明に現れるはずであり、そのような問題意識からもっと深く関連付けてくれると有難いのだが、無いものねだりであろうか。

その意味では、アーリントン郡を事例とするクリエイティブ産業の分析(第8章)も興味深い。ちなみに、同郡にはAmazon社の第二本社の進出が決定されており、グローバル化とICT産業を正面から受け止める形の都市経営論に発展できる分野であろう。また、1990年代のNAFTAに促進されるアメリカ農産物のメキシコ流入と、メキシコ農村からの出稼ぎ労働者がアメリカの農業やサービス業に流出するダイナミックな経済社会の連携の説明(第6章)は、まさに「外なるグローバル化」と「内なるグローバル化」の典型的な現象であり、今後の一層の研究の進展が期待される。

また、コラムも面白い。名作映画「夜の大捜査線」を使ったハイエク論や、映画「ガンホー」から「内なるグローバル化」として日系企業のアメリカ進出と定着の社会的な意味を考えるなど、様々なストーリーを社会科学的に深読みする面白さを再確認させてくれる。

加藤美穂子(香川大学)

小谷耕二 編

『ホームランドの政治学

——アメリカ文学における帰属と越境』

(開文社出版, 2019年, 2,860円)

「ホームランド」という用語は特殊で、9.11テロ以降「ホームランド・セキュリティ」などと、テロや外敵の脅威から国土を守るという文脈で用いられる。本書は、この今日的で政治的な用語をキーワードとして、「アメリカのナショナル・アイデンティティの形成、変容、解体、および再構築」を文学作品や映画を通して見直しており、ソローから現代の日系作家まで幅広く網羅した7つの論考からなる。

岡本太助氏の「パフォーマンスによるボーダーランドの再地図化——アメリカン・ホームランドの辺境における観測」は、ヴェルデッキアとゴメス・ペーニャの作品では、すでにアイデンティティ(being)の問いを超えて、自らが主体的に選択する「生成変化」(becoming)へのシフトが起こり、むしろボーダーランドこそ自らの居場所として選び取る「逆説的なホームランド」が作り出されている点を指摘している。高橋勤氏の「モルルス信号の政治学——ソローと19世紀ネイティヴィズム思想」では、『ウォルデン』『日記』などに見られるアイルランド移民の描写から、リベラリストとして見られがちなソローの差別とも言える「保守的な偏狭さ」、ひいては「祖国意識」(ネイティヴィズム)を浮き彫りにしている。竹内勝徳氏の「『イノセント・アブロード』にみる虚構のホームランド」では、アメリカとヨーロッパ諸国を対比する際に、カリカチュア的な語りによって互いに「脱神話化」され、「トランスナショナリズムとホームランド的なナラティブが奇妙に結託する構造」になっている点を明らかにしている。小谷耕二氏の「フォークナーにおける<境界>とホームランド」では、『行け、モーセ』と『墓地への侵入者』において、様々な「境界」を越えようとする人物に着目し、アイクは理想郷としての荒野を、チックは故郷南部という現実の場所を、ルーカスは人種の境界を超えた新たなアイデンティティを、それぞれの「ホームランド」として追い求めているという指摘である。

喜納育江氏の「カレン・テイ・ヤマシタのホームランド——『Iホテル』におけるサンフランシスコのアジア系移民の故郷と物語空間」では、「故郷とは自分自身の身体」と答えるヤマシタにとって「ホーム」とは、「個々のもつ一瞬の感覚」であり、場所にとらわれず創出できる自由さをもっていることを論証している。牧野理英氏の「異国の祖国——ヤマシタとイシグロの70年代と日本」では、ヤマシタの「風呂」とイシグロの「夕餉」で描かれる日本は「ホームランド」としては見ることはできず、敗戦と急激なモダンシティの中で変容していく「シュールな異国」と「奇異な目」で見ていると論じている。高野泰志氏の「空飛ぶ円盤ホームランドを襲撃す」では、ハリウッドが「母国/家族」が危険にさらされる「侵略映画」を数多く作り続けている背景には、アメリカ人の抱く侵略への不安と同時に、帝国主義的欲望があることを、『宇宙戦争』などの映画を通して論証している。

早瀬博範(佐賀大学)

菅 英輝 著

『冷戦期アメリカのアジア政策』

——「自由主義的国際秩序」の変容と
「日米協力」

(見洋書房, 2019年, 5,280円)

リベラルな価値観や多様性を否定するドナルド・トランプの言動に対する批判が、アメリカ国内外から高まっている。トランプ現象は、「リベラルな国際秩序」を掲げてきたアメリカの伝統の中で、逸脱的な事象なのか。こうしたトランプ例外論に偏りがちな昨今の論調に対し、日本におけるアメリカ外交史の大家による本書は、アメリカが掲げてきたリベラルな規範や原則に内在する非リベラル・反リベラルな側面を敷衍し、リベラルな価値観を所与とした戦後国際秩序論争に警鐘を鳴らしている。

著者によれば、アメリカは「リベラルな国際秩序」の形成過程で、多くの矛盾を内包し、様々な妥協を繰り返してきた。その結果、民主主義よりも経済的自由主義を、脱植民地化よりも冷戦の論理を優先するアメリカの行動は、「自由・民主主義・平等」を唱えながら、同時に、「階層的、帝國的」な支配構造を有する歪な秩序を冷戦期のアジアにもたらしたというのが、本書の主張である。

この秩序形成の際、アメリカが重視したのが、現地の「コラボレーター」の育成であった。アメリカからの安全保障や経済・軍事援助の提供を条件に、ワシントンが設定した「ルールや規範」を順守するコラボレーター政権は、直接の領土支配を伴わないまま、他国を管理する「非公式の帝国」を維持するため、不可欠な存在であった。著者は、日米安保による戦略面での支配・従属関係に鑑み、日本もまた、冷戦期に形成されたコラボレーターという装置の一つであり、その役割を今日まで維持してきたと指摘する。

その一方、アメリカのコラボレーターである日本に対する要求が、常に一定ではなかったことは、冷戦の変容とアメリカのパワーの後退により、日本の役割分担が拡大する過程を緻密に分析した第二部を通読すれば明らかである。第四章では、沖縄返還を最優先する佐藤政権が、国内世論の批判のある中、ジョンソン政権の要求通り、ベトナム戦争での政治的、経済的な支援拡大を強いられる経緯が論じられる。第五章のコラボレーターである日本が、アメリカの経済援助を補完する立場からではあるが、ベトナム戦争の拡大で対韓援助を削減するアメリカの要請に応える形で、韓国の経済発展に寄与したとの指摘は、韓国の経済成長を対米要因か自主要因、あるいはその両方の要因から分析する先行研究とは一線を画すものであり、興味深い。

以上のように、本書は冷戦期アメリカのアジア政策に関する優れた研究書というだけでなく、今日の日米韓の関係を考える際にも示唆に富んだものと言える。専門家だけでなく、国際問題に興味を持つ一般読者にも手に取ってもらいたい一冊である。

溝口聡 (関西外国語大学)

梅川葉菜 著

『アメリカ大統領と政策革新』

——連邦制と三権分立制の間で

(東京大学出版会, 2018年, 6,820円)

オバマ政権の主な業績については最初の二年間に集中し、分割政府の状態となった2011年以降は、議会共和党の激しい反発に直面して特に内政面では重要な改革を実現できなかったと指摘されることが多い。しかし、実際は議会の強力な抵抗を撥ね退けて実現した2014年の教育改革のような事例も存在する。本書は、オバマ政権がこの教育改革を達成する上で活用した「特区認可権」と呼ばれる権限に焦点を当てることで、近年のアメリカ大統領の政策実現能力について考察している。

特区認可権とは、「連邦法に従って州政府が実施している政策に関して、州政府が従来の連邦法の下では実施できない、その連邦法の目的を実現するためのより良い方法だと見込まれる新しい事業、いわゆる特区事業を州内の特定の地域、期間内で特別に執行できるように認める、執政府に与えられた権限」(4頁)である。オバマ政権はこの権限を用いることで、議会を迂回する形での政策変更を達成したが、本書によると、そのような事例はオバマ政権以前から存在する。すなわち、元々ケネディ政権によって導入された特区認可権は、レーガン政権期に政策変更のための手段として本格的に運用されるようになり、これ以降、福祉政策や医療保険政策、そして上記の教育政策といった政策領域で活用されてきた。

無論、三権分立制の下で、大統領は立法権をもたず抑制均衡の下に置かれている。それにもかかわらず、なぜ大統領はそれを脅かすような手段を獲得することができたのか。これが、本書が投げ掛ける大きな問いである。そして、この問いに対して本書は連邦制こそが鍵であると主張し、「連邦制が三権分立制に作用する」という独自の視点を提供する。

レーガン政権以降の各政権は、当初立法による政策実現を目指した。しかし、厳しい党派対立の影響もあり、それは困難であった。そこで、各政権は特区認可権に着目するようになったが、こうした動きに州政府の側も協力し、大統領の政策方針に積極的に応じたことで政策変更が実現していった。しかも、興味深いことに各政権に協力した州政府の側には党派の偏りは見られなかった。

本書は、議会を介さずに大統領と州政府が協力することで政策が変更される可能性があることを示しており、新たな政策変更の類型が存在し得ることを明らかにしている。また、本書は分極化の影響についても重要な指摘を行っており、二大政党間の対立により議会の活動が停滞している状況であっても、政策変更が生じる可能性を論じている。このように、本書の意義は極めて大きいものがあり、大統領制研究や連邦制研究をはじめ様々な分野の研究において参照され続けるはずである。

宮田智之 (帝京大学)

水野剛也 著

『有刺鉄線内の市民的自由』

——日系人戦時集会所と言論・報道統制』

(法政大学出版局, 2019年, 6,380円)

本書は第二次大戦中の日系アメリカ人強制収容の初期の収容施設であった「集会所」(原語は Assembly Center)における印刷物の規制・検閲, 日本語使用の禁止などの実例を通じて, 戦時における市民的自由の脆弱性と「自由の国」の民主主義が抱える矛盾と葛藤を照射する力作である。著者はコミュニケーション学の専門で, 3冊の学問的単著がある。『日系アメリカ人強制収容とジャーナリズム』(春風社, 2005年)では強制収容に関するリベラル雑誌と日本語新聞の報道を, 『敵国語』『ジャーナリズム』(春風社, 2011年)では米政府と日系新聞人たちの不均衡な相互依存関係を分析したが, 本書ではジャーナリズムの射程を超えて, 西部防衛指令部の下に作られた「戦時民間人管理局(WCCA)」が日系人に対して行った言論統制や活動規制を膨大な資料から検証している。

著者は, 日米開戦当初, 米政府が日本語新聞を即弾圧するのではなく自発的な検閲を促すことで統制下に置いたこと, その結果として日本語新聞の内容が開戦前の親日的な論調から親米へと急激に変化したことを指摘する。しかし, 西海岸からの総移動を推した陸軍の中でもとりわけ反日的なカール・ベンデッツェンがWCCA局長となると, 防衛地域内の日本語新聞は全て廃刊となり, 「集会所」は軍政に近い厳しい統制の下に置かれた。日本語使用が少人数の私的会話以外では一切禁じられたため, 一世は情報から遮断された。社交・娯楽に関わる集会でさえ事前に話される内容の英語訳の提出を義務付けられ, 集会当日も言動を徹底的に監視された。法話の日本語も禁止されたため, 仏教徒の宗教活動には大きな支障が生じた。「集会所」の英字新聞も全て検閲に遭っただけでなく, 間接的な圧力から報道は当局に都合の良いものに付度された。統制は外部から訪れる人々にも及んだ。二世の大学進学を支援した「全国学生転住委員会」のメンバーは, 被収容者の居住地区の訪問を許されず, 面会には進学に直接関わる以外一切話さないよう監視がついたのみならず, 所内の様子を外部で報道することも禁じられた。軍関係資料と日系人史料を併用することで, 被収容者の不安や怒り, 苦悩を本書は余すところなく描いている。

軍がなぜ「敵国語」への極端な猜疑心を持ったのか, なぜ諜報や戦争に無関係な演芸会や盆踊りといった娯楽までも監視の対象に置いたのかなどについて考えるには, 単なる人種偏見や公民権侵害を指摘するにとどまらない, 戦争と「他者性」に関するより複雑な考察が必要だろう。しかし, これまでの収容所研究のほとんどが戦時転住局(WRA)の政策に限って分析しているのに対し, 軍の政策を膨大な一次資料から実証し, 強制収容が日系人に与えた傷の深さを改めて浮き彫りにした本書が, この分野に大きく貢献することは間違いない。

和泉真澄(同志社大学)

上村直樹 著

『アメリカ外交と革命』

——米国の自由主義とボリビアの革命的ナショナリズムの挑戦, 1943年~1964年』

(有信堂高文社, 2019年, 8,800円)

1910年メキシコ革命に始まるラテンアメリカでの革命的ナショナリズムは, 西半球の超大国・米国の安全, 経済利益, 自由主義的イデオロギーに挑戦するものであった。30年代半ば以降に革命運動が高まる南米の小国ボリビアも例外ではなかった。本書は, 寡頭の支配下にあった錫鉱業の国有化や農地改革といった社会革命を目指す「ボリビア国民革命運動(MNR)」(41年結成, 52~64年MNR政権)と, 反共主義を掲げた冷戦期の「リベラル」な米国が, いかにして敵対ではなく和解と協力を追求していったのかを考察した重厚な研究書である。

本書の「仮定」は次の通りである。トルーマンからジョンソンまでの歴代米政権は, ボリビアでの「革命」が混乱や共産主義の支配を南米にもたらさぬよう, 革命政権を経済的に支援しつつその革命の性格を米国自身のイメージに沿って自らの利益と理念に即したより「リベラル」な形に作り変えようとした。この仮定は, リアリズム(米国の戦略・安保上の利益重視)やリビジョニズム(米国の経済利益や新植民地主義的な支配・従属関係に着目)よりも, 米国の自由主義的な文化やイデオロギーを重視するポストリビジョニズムの分析枠組みの有効性を示すものである(序論)。

「反共」という米国のリアリズムの動機は, ボリビア革命政権との「和解」と「協力」の初期段階で重要な役割を果たした。米国がMNR政権を承認(和解)した背後にはMNRによる「反共的性格」の強調があり(第3章), 革命開始の混乱で経済破綻が懸念されたボリビアへの緊急経済援助(協力)も, MNR政権瓦解による共産主義拡大の恐れから決定された(第4章)。しかし, その後, 米国の援助によりボリビアの経済破綻や共産化への懸念が後退しても, 米国は, リビジョニズム的動機(経済利益)に乏しいボリビアへの経済援助を拡大する。そして, その過程で追求されたのが, ボリビア経済低迷の「元凶」と見做された非効率な国家主導の民族主義的経済政策の修正であった(第5~9章)。ボリビア革命を「進歩のための同盟」の「モデル」と称賛しつつ, 革命の賜物であった国営鉱山の「合理化」を強く迫ったケネディ政権に顕著なように(第8, 9章), 米国は革命ボリビアに自由主義的イデオロギーの共有を求め続けたのである。だが, 痛みの伴う経済改革は多くの労働者を敵に回し, 結局, 米国が支持したMNR政権は64年のクーデターで崩壊してしまう(第10章)。しかもクーデターを主導したボリビア国軍は, 50年代半ば以降, 改革に伴う治安悪化を懸念した米国の指導と支援により強化された軍隊であった。

冷戦後の米国による自由主義の世界大の拡散がもたらした功罪が激しく問われている今, 本書は, 冷戦期米外交の歴史から, その問いに貴重な示唆を与える。

草野大希(埼玉大学)

巽 孝之 著

『パラノイドの帝国』

——アメリカ文学精神史講義』

(大修館書店, 2018年, 2,420円)

来年の再選を見据え、トランプ大統領のパラノイア的な言動に世界中が振り回されない日がない今日ほど、民主主義が衰退し、合衆国がファシズム国家に変貌しつつあるという感慨が肌身で感じられる時代もないように思われる。反知性主義、陰謀史観、ポピュリズムが共依するかのよう世界を席卷している現在、いつの間に文明がかくも劣化したのかと、現代版エレミアの嘆きを発する向きも少なくないだろう。だが、果たしてそのようなアポカリプティックな認識は、この本質を的確に捉えているのだろうか。マクロ的に見れば、トランプも歴史の徒花に過ぎず、丘の上の町に君臨する人工国家、「アメリカ」のデザインそのものが壮大な妄想だったのではないのか。

ピューリタンの植民地時代に遡る合衆国の淵源にパラノイドの起源が潜むことを踏まえつつ、透徹した眼差しで「パラノイド・ナラティブの精神史」を丹念に掘り起こそうとする本書は、反知性主義の時代を逆手に取るようとする強靱な知性の在りようを自ずと物語っている。著者が過去10年にわたって学会シンポジウム、共同研究等において展開してきた論考が、「パラノイドの帝国」をめぐるしなやかな文学的営みを逆照射する書物として結実した背景には、そのように閉塞感に満ちた時代の要請があったことは確かだ。だが本書の真骨頂は、アメリカ史の地下水脈に浸透するパラノイ的な世界観が美意識と相まって乱反射することにより、かえって逆説的に限らない復元力を秘めた文学的想像力を育ててきたことを克明に炙り出したところにある。ミュータントさながら変異を繰り返し、あらゆる境界線を無化してきたパラノイドの潜む闇は広大にして錯綜を極めていながらゆえに、彼らはアメリカの想像力に独自のクリエイティヴな物語の磁場を提供してきたのだ。

パラノイド・スタイルの文学は冷戦期に絶頂期を迎えたように見えるが、実際それは多様な言説の準拠棒として変幻自在に変奏され、今日まで着実に命脈を保ち続けている。10章からなる本書は、ホフスタッターへのオマージュとして執筆された。「講義」と銘打たれているように、著者はライブ感溢れる親しみやすい語り口でピンチョンとディックから説き起こし、日米作家のみならずSFや映画も狙上に載せ、パノラミックにパラノイド・スタイルを検証していく。例えば、第4章「空から死神が降ってくる」におけるカッサンドラの洞察による「未来の記憶」、第6章「都市は準宝石の螺旋のように」におけるマルチプレックス文学としてのディレイニーの『ダールグレン』論、第8章「災害狂時代」における『カストロフィア』や『エコ・テロリズム』、終章「内乱の予感」におけるエリクソンの『シャドウバーン』論など、「極小のエンサイクロペディア」としての機能も備えた本書が誘う新たな知の地平は、破滅的な時代こそが、アメリカ文学を開花させてきたことを改めて実感させてくれる。

渡邊克昭 (大阪大学)

松永京子 著

『北米先住民作家と〈核文学〉』

——アポカリプスからサバイバンスへ』

(英宝社, 2019年, 3,740円)

本書は、核の脅威や不安を描く〈核文学〉の研究において見過ごされてきた先住民の文学を、エコクリティシズムとポストコロニアリズムの見地から捉え直そうとする野心的な研究の成果である。

本書の射程を詳らかにする序章では、核文学研究とエコクリティシズムおよびポストコロニアリズムとの関係が丹念に解きほぐされる。1945年から冷戦期を経て現在にいたるまで、「ニュークリア・アポカリプス」(核や原爆による世界の終焉)の可能性が、多くの作家の想像力を掻き立て、また彼らの創作は数多の研究者を惹き寄せてきた。核をめぐる文学研究は終末観を中心に進展したのだが、1990年代には核汚染をめぐる言説が紡がれるようになった。ウラン鉱山、核実験場、核施設、核廃棄物処理場などが環境に及ぼす影響を主題化する核汚染の言説は、環境正義や脱植民地主義の立場から先住民にも目を向けていった。先住民や彼らの土地を搾取する「核の植民地主義」の文脈において、先住民はことごとく不可視化されてきたが、先住民はけっして沈黙していたわけではない。核の植民地主義に対する5人の先住民作家の応答に分け入る6章立ての本論がその証しとなる。

第1章では南西部プエブロの反植民地主義の系譜に位置づくアコマ族のサイモン・J・オーティーズの詩集『ファイトバック』の語り、いかに先住民労働者の連帯を促し、サバイバルの物語を構築するのかを検証する。第2章ではラグーナ保留地のウラン鉱山の破壊的な影響をふまえたうえで、レスリー・マーモン・シルコウが小説『儀式』において部族の物語や汎部族的な儀式を通じて提示するサバイバルのヴィジョンを解き明かす。第3章ではシルコウの長編『死者の暦』を狙上に載せ、ウラン鉱山に出現した蛇の石像に象徴される精霊の働きに注目しつつ、先住民の土地や自治権の回復運動が南北アメリカの抑圧と破壊の構図を転覆する可能性に論及する。

第4章ではワシントン州のハンフォード核施設をめぐる核文学の系譜において、シャーマン・アレクシーがいかに先住民の声を可視化してサバイバルの物語を紡いでいるのかを、詩集『ブラック・ウィドウズの夏』を通じて明らかにする。第5章ではテネシー州オークリッジで幼少期を過ごしたチェロキー族のマリルー・アウィアクタが、核の最前線と化す町の物語のなかに、チェロキーの歴史や口承伝統を結びつつ溶かし込んだサバイバルの詩学を抽出する。第6章ではジェラルド・ヴィゼナーが小説『ヒロシマ・プギ』において、大田洋子をはじめとする原爆文学を踏襲しながらも、アニシナベ族のトリックスターとサバイバンスの物語に接続し、被爆者を犠牲者という類型から解放しようとする試みを評価する。

部族的な物語を通じて核の植民地主義に抗い、終末論的な思想を乗り越えようとする先住民作家の修辞戦略を炙りだしながら、核文学研究の多角的な再構築を見事に達成している。誠実で学ぶところの多い業績である。

余田真也 (東洋大学)

2019年度アメリカ学会年次大会分科会報告

於：法政大学
2019年6月2日

アメリカ政治分科会

今年度のアメリカ政治分科会では、清原聖子会員（明治大学）より、「アメリカにおけるメディアの分極化とフェイクニュース問題」という題目で報告いただいた。報告では、まずフェイクニュースの定義や類型等を確認したうえで、その発生の背景として、アメリカのメディア環境の特徴について説明がなされた。とりわけ、近年ではメディアの分極化とそれに伴う有権者の情報源の分極化、また選挙情報源としてのソーシャルメディアの台頭が顕著に見られ、こうしたメディア環境の変化がフェイクニュース問題の発生に深く関わっていたということである。また、報告では、2016年大統領選以降に見られた新たな側面についても言及された。たとえば、フェイクニュースが蔓延する状況に対し、メディア等によるファクトチェックが行われるようになったほか、政治広告への規制を求める動きや、プラットフォーム事業者の責任を問う議論も見られるようになったということである。

報告後には、参加者との活発なディスカッションが行われ、フェイクニュース問題を多角的に考察する有意義な機会となった。分科会の最後には、現責任者の菅原より、来年度から宮田智之会員（帝京大学）に責任者を交代する旨の提案がなされ、承認された。

（菅原 和行）

アメリカ国際関係史研究分科会

竹本周平会員（国際教養大学）に「米ソ核軍備管理交渉史の再検討」と題する報告を行っていただいた。報告はまず、昨今の INF 条約の失効や 2021 年に期限を迎える新 START 条約などに触れ、冷戦期から継続されてきた核の軍備管理体制が岐路に立っている点を指摘した。そしてこのような現状に鑑みて、米ソ（露）が進めてきた核の軍備管理を批判的に再検討する意義を強調した。とりわけ報告の要点は、核の軍備管理が目的としてきたとされる「戦略的安定性」についての概念整理を先行研究に依拠して行い、米ソ（露）間で必ずしも共通認識があったわけではないことを考察したことにある。そして、SALT 以降進められてきた軍備管理が実際には狭義の「戦略的安定性」に基づくものである点を明らかにし、最後に今後の核軍備管理の課題を指摘した。報告に対し討論者の倉科一希会員（広島市立大学）から、冷戦型軍備管理である SALT の現代的意義、米ソ軍備管理・軍縮における拡大抑止及び第三国要因の重要性などについてコメント・質問がなされた。フロアからも、冷戦期の軍備管理 SALT と冷戦後の軍縮レジームとしての START の区別、戦略核以外の軍備管理（PTBT など）の重要性、INF 条約の意図と成立経緯などについて質問がなされ、活発な討論が行われた。

（水本 義彦）

日米関係分科会

2019年度の「日米関係」分科会において、清水隆雄会員（元国立国会図書館専門調査員）より「日米安保体制と辺野古基地の建設——『巻き込まれ論』と『見捨てられ論』の狭間で」と題する報告をいただいた。

報告では、日米安保条約締結時から存在する「巻き込まれ論」、および沖縄返還に前後して現れた「見捨てられ論」の影響の具体例が示され、その上で、日米安保条約にかかわる問題の根源は日本側の「見捨てられ論」にあり、アメリカは交渉カードとして、米軍基地経費の要求や米軍主導の軍事態勢を維持するよう行動していることが述べられた。

また、本土における基地闘争が1950～60年代をへて基地返還・整理につながり、本土の住民は納得した一方で、沖縄における米軍基地の過密状態は見過ごされ、普天間基地移設問題に関しては、アメリカのアジア安全保障への関与の証拠として、海兵隊のような「地上兵力」の配置を希望する、日本側の「見捨てられ論」に端を発する問題であることが指摘された。

報告後のフロアとの質疑応答では、アメリカ側の利点が多い安保条約に対する日本人の認識の低さの背景、米軍が日本から撤退していく1950年代と、米軍全体のイメージが向上する1970年代との時間的なギャップは何か、日米安保体制の今後のあり方、など多くの質問がなされた。

（末次 俊之）

経済・経済史分科会

吉田健三会員（青山学院大学）から「アメリカ退職後所得保障システムの変化——生計と政策的争点への影響」のテーマで報告をいただいた。以下は吉田氏による要旨である。

20世紀末よりのアメリカ年金システムの変化について報告を行った。具体的には、いわゆる伝統的な確定給付型年金から401(k)プランを代表とする確定拠出型年金への移行について報告が行われた。この現象は、しばしば製造業を中心としたミドルクラス経済の崩壊の象徴として、リスクや拠出負担の雇用主から被用者への転嫁やそれに伴う退職後所得保障の不安定化として議論される。しかし、一方でこの年金システムの変化は、かつての企業年金の提供基盤が崩壊する状況において、なお第二階部分に相当する退職後所得保障を維持する変化である、という点をアメリカの統計資料その他を通じて明らかにした。実際に、アメリカ401(k)プランの保障水準は、どの程度であるか、またそもそも日本の年金システムと比較してアメリカの年金システムにはどのような特徴があるのか、さらにトランプ政権の登場は、この年金システムにおいてどのような意味を持つものであったのか、と言った点について質問がなされ、議論が行われた。

(名和 洋人)

アジア系アメリカ研究分科会

6月2日、莊中孝之氏（京都外国語短期大学）による、「カズオ・イシグロとアメリカ」の発表があった。報告要旨に沿ってパワーポイントが映写され、アジア系アメリカ文学研究者をはじめ多岐にわたる聴衆者にとって興味深い報告であった。

イシグロは、その出自から日本とイギリスとの関係ばかりが取りざたされるが実は、アメリカとの間には浅からぬ縁があるという視点から始まった。彼は長崎生まれの被爆二世であり、初期の作品、『遠い山なみの光』（1982）では原爆の存在が背景に強く意識されていた。ノーベル文学賞受賞記念講演でも認めている通り、映画や音楽といったアメリカの大衆文化から大いに影響を受けている。そこにはかなりの音楽愛好家であった、アメリカへの留学経験もある海洋学者の父から受け継いだものもあったであろう。さらに近過去のイギリスを舞台にしてクローンを主人公に据えた『わたしを離さないで』（2005）は、アメリカにおける奴隷制の暗喩として読むことも可能である。イシグロはそのような巨大なアメリカ文化の存在を認めながらも、他方でそのあまりにも強大な力を恐れている。莊中報告では、イシグロとアメリカとの関りが、伝記的な事実や作品の解釈、作家自身の言葉を引用し提示された。

(野崎 京子)

アメリカ女性史・ジェンダー研究分科会

小檜山ルイ氏（東京女子大学）の『帝国の福音——ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』についての合評会をおこなった。近代プロテスタントの宣教活動と帝国主義の関係を、20世紀前半に海外伝道促進活動に尽力し東京女子大学をはじめとするキリスト教女子大学の設立に関わったルーシー・ピーボディに焦点を当てて考察したこの本について、まずは著者より紹介がされた。小檜山氏によって、海外伝道に尽力したルーシー・ピーボディという個人を主体とした物語を時代のイシューとどうクロスさせるのか、忘れられた人物の記憶をどう掘り起こし資料にどう向き合うべきなのか、今日における帝国主義研究の可能性についてなどが語られた。その後、松原宏之氏（立教大学）と安武留美氏（甲南大学）によるコメントがされた。松原氏からは歴史研究における個人史・評伝の可能性についてや、帝国主義文化と女性海外伝道の関係について指摘がされた。安武氏からは女性の領域を意識しながらもその境界線を崩していくこの時代の女性による活動についてコメントがされた。

合計25名が参加したこの分科会では、フロアからファンダメンタリズムという言葉のこの時代における意味、フェミニズム研究とのつながりの可能性など、活発な議論が交わされた。

(鈴木 周太郎)

アメリカ先住民研究分科会

プエブロ土器の変遷は外部からもたらされた政治的・社会的変化の荒波を、人々が土器製作という日常の実践をもって生き抜いてきたことを示している。報告において飯山千枝子氏（日本エッセイスト・クラブ）は、祈りを体現した先史時代の土器製作が、スペイン統治下において入植者向けの日用品雑器製作へと主軸を移していったこと、その一方で信仰を反映させた土器製作も密かに継続されていたことを指摘した。植民地時代に獲得された侵略・侵入への対応の術は、合衆国領有後、先住民の手工芸品が「インディアン・キュリオ」として収集の対象となるといかに発揮され、汎プエブロ文化の創出へとつながっていった。報告では数々のプエブロ土器の映像が提示され、重要なモチーフである水の文様などについて概説がされた。飯山氏は20世紀前半の土器品質改良運動によって登場した「黒地黒影様式」や、汎プエブロ文化を象徴する「ストーリーテラー」など、今日広く知られるプエブロ土器がどの様に過去を内包しつつ、どの様に新たな可能性を切り開いてきたのかを明らかにした。フロアからは土器製作への部族政府の関与について質問がされたが、返答として部族の統制下に置かれた産業とはなっていないこと、生活・文化実践としての土器製作において女性が重要な役割を果たしていることが言及された。

(川浦 佐知子)

初期アメリカ分科会

本年度の初期アメリカ分科会では、鰐淵秀一氏（共立女子大学）による「ポスト共和主義パラダイム期のアメリカ革命史研究——Gordon S. Wood vs. *William and Mary Quarterly*」と題する報告にもとづいて討論が行われた。

今回の初期アメリカ分科会の運営方針は、これまでのような研究動向の網羅的レビューではなく、今日のアメリカ革命史研究をめぐる現状認識の共有と世代間対話を目的としたオープンディスカッション形式のミーティングを試みることにした。

議論の導入として、鰐淵会員は合衆国におけるアメリカ革命史研究の現状を「ポスト共和主義パラダイム期」と捉え、1990年代に共和主義論の影響力が減退し、21世紀に入り顕著となった大西洋史や大陸史、グローバル史の興隆の中で研究関心の多様化や新たなパラダイムの模索が進む状況について整理を行った。さらに鰐淵会員には、特に2010年代に入って顕在化した当該分野の指導的歴史家 Gordon S. Wood と指導的学術誌 *William and Mary Quarterly* の対立と論争を中心に紹介していただき、そこから浮かび上がるアメリカ革命史研究の現状と方向性を確認し、それをもとに参加者間の自由な討論を行った。多数の参加者による議論は盛況なものとなり、今後の初期アメリカ研究の方向づけにもつながり得る有益な部会となった。

（石川 敬史）

文化・芸術史分科会

今回の分科会では、「ツーリズム」というテーマで、山本桂氏（埼玉大学・講）と進藤幸代氏（多摩美術大学）に報告を行ってもらった。山本氏は、「対米観光政策にみる戦前期の観光地日本」というタイトルで発表を行った。日本では1912年に官民合同でジャパン・ツーリスト・ビューローを創設し国外からの訪問客へサービスを開始したが、そこで製作されたガイドブックやポスターには日本の近代化や帝国主義を強調する一方で日本の古さや伝統をも押し出すという複雑な心理が表象されていたことが印象的な視覚資料とともに紹介された。戦前の対米観光政策のなかで提示された「観光地日本」が、単純なオリエンタリズムの反映として一方的に「見られる」対象になっていただけでなく、「運れてきた帝国主義国家」としてそうした視線に抵抗するような表象も提示していたという点で非常に興味深い報告であった。進藤氏は、「スポーツ・ツーリズムにおけるホストとゲストの関係——runDisney を事例に」というタイトルで発表を行った。本発表では、アメリカのディズニーリゾートで開催されるマラソンイベント runDisney を事例に、既存の観光地がスポーツイベントを組み込むことで見えてくるホストとゲストの関係性について報告が行われた。runDisney において、ゲストは他のゲストによって「見られる」対象にもなるように構造化されており、「見る」と同時に「見られる」対象でもあるという二重の役割をホストによって与えられていることが明らかにされた。報告後の質疑応答も活発に行われ、大変充実した分科会となった。今後も継続的に分科会を開催し、アメリカ学会における文化・芸術分野の拡充に寄与したいと考える。

（小林 剛）

アメリカ社会と人種分科会

「アメリカ社会と人種」分科会では合計33名が参加し、南川文里会員（立命館大学）が報告を行った。本報告では、一部の研究者や政治家などが多文化主義を「失敗」とみなす現状を批判し、アメリカ合衆国における多文化主義の「現在地点」を見出すための視点に対する考察が行われた。南川会員はまず国際比較研究のなかのアメリカ型多文化主義の特徴として、「非公式多文化主義」、「人種主義」への関心の高さ、ムスリムをめぐる課題への関心の低さをあげて、多文化主義国家としては「中間的」な評価を受けていると指摘した。本報告では、現代の多文化主義的な制度が反多文化主義による攻撃とその受容によって形成され、その結果差別の歴史に対する批判や補償よりも「多様性」の実現を軸とした思想・運動へと多文化主義が転換した点に注目する。そのような観点から、多文化主義政策の成果と課題を社会科学的方法で検証することの重要性を南川会員は強調した。質疑応答ではニクソン政権期の政策と多様性の関係、白人を新しいマイノリティと捉える研究、アイデンティティ・ポリティクスに回収されない多文化主義の捉え方、国家的な枠組みで多文化主義を捉える限界、そして公共圏との関わりなど活発な議論が展開された。

（武井 寛）

OA H 年次大会への参加費用補助のご案内

2020年4月2日から5日まで、ワシントンD.C. (Marriott Wardman Park) において Organization of American Historians の年次大会が開催されます。アメリカ留学中の大学院生会員の皆様には、この学会の旅費および宿泊費が補助される制度があります。応募条件は以下の3点です。

1. アメリカ学会の会員であること。
2. 日本国籍または日本での永住権を持っていること、あるいは日本との強い結びつきがあると認められること。
3. アメリカ合衆国内の大学院に正式に所属していること。

参加者には全日程への参加と、大会終了後に英文での参加報告書の提出が求められます。参加希望者は、氏名、所属大学院、留学期間、専攻領域、日本の出身校名、過去のこのプログラムあるいは American Studies Association の同様のプログラムへの参加経験 (ASA と OA H それぞれの参加年度と、その時に発表を行ったか否か等)、今年度 OA H での発表予定の有無を明記の上、電子メールでアメリカ学会国際委員会 (international@jaas.gr.jp) まで、2019年12月23日から2020年1月13日までの期間にご応募ください。受給経験者の再応募も可としますが、応募者が多数の場合は、受給経験のない方を優先するものとします。なお、事務局での混乱を避けるため、応募メールの件名は「OA H 参加費用補助応募 (2020)」と必ず明記してください。この年次大会の情報は、<http://www.oah.org/meetings-events/oah19/>を参照してください。

国際委員会

アメリカ学会海外渡航奨励金 — 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。

1. 応募資格：
 - ①アメリカ学会の会員であること。
* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。
 - ②国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
 - ③発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
 - ④大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。
2. 審査基準：
 - ①大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
 - ②American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
 - ③他組織からの援助のないものを原則として優先する。
 - ④そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。
3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類
 - ①次の書類を12月16日～31日までの期間に、国際委員会 (international@jaas.gr.jp) 宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書 (電子メール可)
 - (4) 発表のタイトルと要旨 (英語で250-300語程度とする)
 - (5) (ASA, ASAK, OA H 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報 (目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること)
 - (6) 理由書 (奨励金を必要とする理由。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費 (実費) の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。)
 - ②審査結果は、1月中に応募者に通知し、学会HPで公表する。
 - ③発表終了後に報告書 (邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする) および領収書の原本 (旅費・宿泊費) を提出すること。
4. 支給額
アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人15万円を原則とする。

国際委員会 (international@jaas.gr.jp)

『英文ジャーナル』第32号原稿募集のお知らせ
The Japanese Journal of American Studies—Call for Papers

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 32nd issue (June 2021) of the *Japanese Journal of American Studies*. As always, we welcome papers on any topic within the field of American Studies that shed light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economics, law, art, architecture, etc.

The coming issue's special topic is "transnationalism." Since we have witnessed and participated in the newly emerged discipline of transnational American Studies these past 10 years, it is time to ask for papers that will cover various transnational issues and phenomena in the field of American Studies or in topics related to the trends and developments within our academic discipline. "Transnational" may also refer to our own positionalities, which may bring in stimulating perspectives.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), are due by January 5, 2020, and should be sent to the JAAS Editorial Committee via email at engjournal@jaas.gr.jp as attached electronic files. Completed manuscripts will be due May 10, 2020 (maximum 8000 words, including notes) and should also be sent to the above e-mail address. Papers must be written in English, based on original research, and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue.

Naoko Sugiyama, Editor, *JJAS*.

~~~~~  
『アメリカ研究』第55号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2021年3月に第55号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。  
執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。[http://www.jaas.gr.jp/journal\\_guide.html](http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html)
3. 原稿締め切り 2020年8月31日（月）
4. 提 出 電子メールで年報編集委員会宛て（[nenpo@jaas.gr.jp](mailto:nenpo@jaas.gr.jp)）にお送りください。  
\*投稿希望者は、論文題目を2020年6月末日までに電子メールで、年報編集委員会宛て（[nenpo@jaas.gr.jp](mailto:nenpo@jaas.gr.jp)）にお申込みください。

~~~~~  
『アメリカ研究』第55号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第55号の特集テーマは、「貧困（仮）」です。趣旨文は次号（4月号）に掲載予定です。「特集論文」に応募希望の会員は、2020年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込み下さい。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。

執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html

原稿締め切りは2020年8月31日（月）。

第1回中原伸之賞公募のお知らせ

第1回中原伸之賞選考委員会は、2019年1月1日～12月31日に出版された作品について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）を受け付けます。

推薦する場合には、件名を「第1回中原伸之賞候補推薦」として2020年1月10日（金）までに、中原伸之賞選考委員会宛にメール（nakahara_prize@jaas.gr.jp）までご応募ください。

*「アメリカ学会 中原伸之賞」は、公益財団法人アメリカ研究振興会理事長の中原伸之氏からの個人寄付金を基金として、2020年度から設けられるものです。この賞は、本学会員の第二作以降の単著（年齢制限なし）ないしは本学会員の最初の単著（この場合のみ出版時50歳以上であること）のなかから、日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に、賞金5万円と賞状を贈るものです。

大会企画委員会からのお知らせ

第54回年次大会は2020年6月13日（土）・14日（日）を予定しておりますが、この日は札幌にてYOSAKOIソーラン祭が開催される日程と重なっております。航空券や宿泊の手配が困難になることが予想されますので、例年よりもお早めの予約をされますよう、お願い申し上げます。

新入会員（2019年10月1日現在）

阿部 啓	東京大学（院）	史 社 宗
小坂 幸三	帝塚山大学（名）	史 宗 化

（*入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ウェブサイトに記載されている新表記法による）

編集後記

「死後十年を経て『再発見』された作家」という触れ込みを見て、ロシア・ベルリンの『掃除婦のための手引き書』（岸本佐和子訳）を読んでみた。「再発見」された作家と言え、アメリカ文学史ではメルヴィル、ディキンソンなどが即座に思い浮かぶが、現代作家ではなかなか見当たらない。読み始めるとすぐにベルリンの表現が持つ切れ味の鋭さと余韻の妙に驚かされた。ヴァライエティに富む実人生に即し、何かに依存しつつ生きざるをえない人間の諸相を、無骨だが鮮やかに切り取っていく作風は類を見ない。晩夏の読書での発見となった。

（山口和彦）

2019年11月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 高橋裕子

編集人 中野勝郎

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町358-5